

デーヴォ ガイド



2023.7.17-23

But **grow** in the grace and knowledge of our Lord and Savior Jesus Christ. To him be glory both now and forever! Amen. II Peter 3:18

L T G ガイド

- ①お互いへの感謝と誉めることを分かち合しましょう。(2~3つ)
- ②1週間の罪を言い表して悔い改め、互いに祈りましょう。
- ③礼拝メッセージの分かち合いをします。
礼拝メッセージの分かち合いが難しい場合はディポジションの分かち合い(なるべく短く)
- ④預言の祈り(主の御心を宣言して祈り)をします。

セル ガイド

- ①祈り、賛美によって主がここにいてくださることを信じ、聖霊様があがめます。
- ②互いの存在を感謝し、尊敬するところを分かち合しましょう。
- ③ディポジションの分かち合いをします。
- ④セルの目的と働きについてみなで共有して、祈り、遣わされて行きましょう。

家族礼拝ガイド

年長のクリスチャンがリードしてください。進め方にはいろいろな意見が出るかもしれませんが、「主に期待する」信仰が最も大切です。いつもの家族でいいのです。

- ①この1週間で神様はすばらしいと感じたのはどんなこと?
- ②この1週間でお互いにどんなことを感謝しますか?(または誉めたいですか?)1つだけ。
- ③聖書のみことばから、どんな実践をして、またどんな恵みがありましたか?
- ④互いの必要のために祈りましょう。

礼拝メッセージフィードバック

<今日の聖書箇所は…>

①神のみこころは?(信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど)

②どんな思いになりましたか?(感情や願いなど)

③生き方にどう適用しますか?(あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか?)

④この世にあって何を実践しますか?

17日 月曜

使徒

11:19 さて、ステパノのことから起こった迫害により散らされた人々は、フェニキア、キプロス、アンティオキアまで進んで行ったが、ユダヤ人以外の人には、だれにもみことばを語らなかつた。

11:20 ところが、彼らの中にキプロス人とクレネ人が何人かいて、アンティオキアに来ると、ギリシア語を話す人たちにも語りかけ、主イエスの福音を宣べ伝えた。

11:21 そして、主の御手が彼らとともにあったので、大勢の人が信じて主に立ち返った。

11:22 この知らせがエルサレムにある教会の耳に入ったので、彼らはバルナバをアンティオキアに遣わした。

11:23 バルナバはそこに到着し、神の恵みを見て喜んだ。そして、心を堅く保っていつも主にとどまっているようにと、皆を励ました。

11:24 彼は立派な人物で、聖霊と信仰に満ちている人であった。こうして、大勢の人たちが主に導かれた。

11:25 それから、バルナバはサウロを捜しにタルソに行き、

11:26 彼を見つけて、アンティオキアに連れて来た。彼らは、まる一年の間教会に集い、大勢の人たちを教えた。弟子たちは、アンティオキアで初めて、キリスト者と呼ばれるようになった。

11:27 そのころ、預言者たちがエルサレムからアンティオキアに下って来た。

11:28 その中の一人で名をアガボという人が立って、世界中に大飢饉が起これると御霊によって預言し、それがクラウディウス帝の時に起こった。



11:29 弟子たちは、それぞれの力に応じて、ユダヤに住んでいる兄弟たちに救援の物を送ることに決めた。

11:30 彼らはそれを実行し、バルナバとサウロの手に託して長老たちに送った。

キプロス人やクレネ人は、ユダヤ人から見たら異質な人々ですが、彼らがいることによって福音の広がる範囲が大きくなったのです。教会も同じです。互いに違いを喜び、そしてそれだけでなくそこから主のわざが進むように方向付けて行きましょう。

教会がバルナバを指導者として派遣したことも興味深いことです。人々が救われているなら、当然同じ十字架と聖霊ですから、その必要もないかと思われませんが、アンテオケのクリスチャンたちはリーダーの派遣を煙たがらずに、むしろ喜びバルナバの奨励に従いました。その一致によって教会がますます前進することができました。

またバルナバはサウロを探して彼を励まし、また教育して育てました。今日、世界中の教会に必要なのは、このように主のために働く人材を育てることです。また自分自身が主のために育てられることです。

このように教会は霊的に成長していましたが、ききんという困難が起きて、むしろそれを愛の証しに変えることができたのです。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？



18日 火曜

使徒



12:1 そのころ、ヘロデ王は、教会の中のある人々を苦しめようとしてその手を伸ばし、
12:2 ヨハネの兄弟ヤコブを剣で殺した。
12:3 それがユダヤ人に喜ばれたのを見て、さらにペテロも捕らえにかかった。それは、種なしパンの祭りの時期であった。
12:4 ヘロデはペテロを捕らえて牢に入れ、四人一組の兵士四組に引き渡して監視させた。過越の祭りの後に、彼を民衆の前に引き出すつもりでいたのである。
12:5 こうしてペテロは牢に閉じ込められていたが、教会は彼のために、熱心な祈りを神にささげていた。
12:6 ヘロデが彼を引き出そうとしていた日の前夜、ペテロは二本の鎖につながれて、二人の兵士の間で眠っていた。戸口では番兵たちが牢を監視していた。
12:7 すると見よ。主の使いがそばに立ち、牢の中を光が照らした。御使いはペテロの脇腹を突いて彼を起こし、「急いで立ち上がりなさい」と言った。すると、鎖が彼の手から外れ落ちた。
12:8 御使いは彼に言った。「帯を締めて、履き物をはきなさい。」ペテロがそのとおりにすると、御使いはまた言った。「上着を着て、私について来なさい。」
12:9 そこでペテロは外に出て、御使いについて行った。彼には御使いがしていることが現実とは思えず、幻を見ているのだと思っていた。
12:10 彼らが、第一、第二の衛所を通り、町に通じる鉄の門まで来ると、門がひとりでに開いた。彼らは外に出て、一つの通りを進ん

で行った。すると、すぐに御使いは彼から離れた。

12:11 そのとき、ペテロは我に返って言った。「今、本当のことが分かった。主が御使いを遣わして、ヘロデの手から、またユダヤの民のすべてのもくろみから、私を救い出してくださったのだ。」

12:12 それが分かったので、ペテロは、マルコと呼ばれているヨハネの母マリアの家に行った。そこには多くの人々が集まって、祈っていた。

このヘロデは、ヘロデ・アグリッパであって、イエス様誕生時に王であったヘロデ大王の孫にあたります。彼は民衆に迎合する権力者でした。今日でもキリストの反対者にはそのようなタイプの人も多いことでしょう。

またすでにヤコブは殺されていますから、ペテロも教会も相当な緊迫した思いであったと考えられます。しかも総勢16人の屈強な兵士に監視されているのは、絶望的な状況です。そこで主はみわざを起こされました。

ここから学ぶことが色々あります。まずは、主のみわざは祈りの中で進められたということです。教会は主のために苦闘する人のために祈らねばなりません。次に、主は簡単に助けることのできるお方だということです。それも思いもよらなかった方法です。人間的な観測でだめだと諦める必要はありません。さらには、救い出されたということが後でわかったということです。ペテロは「今..分かった..救い出してくださったのだ。」と言っています。このように彼は分からなくても主の導きに従ったのでした。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？



➤ 19日 水曜

使徒

12:13 彼が門の戸をたたくと、ロデという名の召使いが対応に出て来た。

12:14 そして、ペテロの声だと分ると、喜びのあまり門を開けもせず奥に駆け込み、ペテロが門の前に立っていることを知らせた。

12:15 人々は彼女に「あなたは気が変になっている」と言ったが、彼女は本当だと言い張った。それで彼らは「それはペテロの御使いだ」と言った。

12:16 だが、ペテロは門をたたき続けていた。彼らが開けると、そこにペテロがいたので非常に驚いた。

12:17 ペテロは静かにするように手で彼らを制してから、主がどのようにして自分を牢から救い出してくださったかを彼らに説明し、「このことをヤコブと兄弟たちに知らせてください」と言った。そして、そこを出て、ほかの場所へ行った。

12:18 朝になると、ペテロはどうなったのかと、兵士たちの間で大変な騒ぎになった。

12:19 ヘロデはペテロを捜したが見つからないので、番兵たちを取り調べ、彼らを処刑するように命じた。そしてユダヤからカイサリアに下って行き、そこに滞在した。

12:20 さて、ヘロデはツロとシドンの人々に對してひどく腹を立てていた。そこで、その人々はそろって王を訪ね、王の侍従ブラストに取り入って和解を願い出た。彼らの地方は王の国から食糧を得ていたからである。

12:21 定められた日に、ヘロデは王服をまとい王座に着き、彼らに向かって演説をした。

12:22 集まった会衆は、「神の声だ。人間の



声ではない」と叫び続けた。

12:23 すると、即座に主の使いがヘロデを打った。ヘロデが神に栄光を帰さなかったからである。彼は虫に食われて、息絶えた。

12:24 神のことばはますます盛んになり、広まっていった。

12:25 エルサレムのための奉仕を果たしたバルナバとサウロは、マルコと呼ばれるヨハネを連れて、戻って来た。

一時は絶対的な権力の前に虫のように弱く見えるようなクリスチャンたちでしたが、状況は一変しました。ペテロは絶対に助からないだろうというのが仲間たちの本音だったようです。祈っていたのに救出を信じていなかったのです。それでも主はみわざを起されました。このことから分かるように、とにかく祈ることです。

強いヘロデの側について弱いクリスチャンたちを苦しめていた兵士たちは、結局そのヘロデに処刑されてしまいました。誰につくかは非常に重要なことです。

またそのヘロデ自身も、最も弱い存在とみなされるような虫に殺されてしまいました。彼は神と自分が同一視されていたが、それを良しとして自分を神と同列に置いたのです。または神を自分のレベルに引き下げてしまったのです。

人を恐れるとわなにかかりますが、主に信頼する者は救われるという厳言のことば通りのことが、使徒の働き時代には起こっています。それは現代も同じで、今も当時と同じ聖霊の時代であり救いの時代です。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？



20日 木曜

使徒

13:1 さて、アンティオキアには、そこにある教会に、バルナバ、ニゲルと呼ばれるシメオン、クレネ人ルキオ、領主ヘロデの乳兄弟マナエン、サウロなどの預言者や教師がいた。

13:2 彼らが主を礼拝し、断食していると、聖霊が「さあ、わたしのためにバルナバとサウロを聖別して、わたしが召した働きに就かせなさい」と言われた。

13:3 そこで彼らは断食して祈り、二人の上に手を置いてから送り出した。

13:4 二人は聖霊によって送り出され、セレウキアに下り、そこからキプロスに向けて船出し、

13:5 サラミスに着くとユダヤ人の諸会堂で神のことばを宣傳伝えた。彼らはヨハネも助手として連れていた。

13:6 島全体を巡回してパポスまで行ったところ、ある魔術師に出会った。バルイエスという名のユダヤ人で、偽預言者であった。

13:7 この男は、地方総督セルギウス・パウルスのもとにいた。この総督は賢明な人で、バルナバとサウロを招いて神のことばを聞きたいと願った。

13:8 ところが、その魔術師エリマ（その名を訳すと、魔術師）は、二人に反対して総督を信仰から遠ざけようとした。

13:9 すると、サウロ、別名パウロは、聖霊に満たされ、彼をにらみつけて、

13:10 こう言った。「ああ、あらゆる偽りとあらゆる悪事に満ちた者、悪魔の子、すべての正義の敵、おまえは、主のまっすぐな道を曲げることをやめないのか。

13:11 見よ、主の御手が今、おまえの上にあ



る。おまえは盲目になって、しばらくの間、日の光を見ることができなくなる。」するとたちまち、かすみと闇が彼をおおったため、彼は手を引いてくれる人を探し回った。

13:12 総督はこの出来事を見て、主の教えに驚嘆し、信仰に入った。

13章から本書は新しい展開に入ります。つまり教会の本拠が、ユダヤ教の中心エルサレムから世界宣教の中心とも言えるアンテオケに移ります。また主役がベテロからパウロに移ります。このパウロによって、伝道の対象がユダヤ人から異邦人（ユダヤ人以外の民族）に移ってゆくのです。

もともと本書使徒の動きは、いかにして教会が前進したのかを明らかにものですから、いかにして教会が世界に広がったか記すのは当然です。アンテオケ教会には様々な人々がいたことが、その指導者を見てもわかります。バルナバハユダヤ人、シメオンは黒人で（イエス様の十字架を担いだあのシモンと同一人物の可能性がありますが）、ルキオは北アフリカのクレネ出身（ユダヤ人が多く移住していました）、マナエンは王室の関係やで位の高い人、そしてサウロはかつてクリスチャンを迫害したユダヤ人でした。教会が信仰で一致するとき、メンバーにある様々な違いが宣教の可能性を生み出すということがわかります。

世界宣教が人の考えや教会の会議からではなく、聖霊によって始まったのだということがわかります。それは教会がひとつになって礼拝し、断食という真剣な祈りのときに与えられました。礼拝の中で主が新しいことを語られるほどに、聖霊が働かれるようでありたいものです。

一行は魔術師との関わりで総督に会うことになりました。聖霊に導かれ、愛を持ってあらゆる人と交わりをするなら、主は宣教を道を開いてくださいます。

魔術師エルマの目が見えなくなったのを目の当たりにした総督でしたが、彼が驚嘆したのはあく

までも「主の教え」であったことは忘れてはなりません。私たちは「主の教え」によって救われ、導かれ、生かされ、そしてこれを伝えるのです。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？





13:13 パウロの一行は、パポスから船出してパンフィリアのペルゲに渡ったが、ヨハネは一行から離れて、エルサレムに帰ってしまった。

13:14 二人はペルゲから進んで、ピシディアのアンティオキアにやって来た。そして、安息日に会堂に入って席に着いた。

13:15 律法と預言者たちの書の朗読があった後、会堂司たちは彼らのところに人を行かせて、こう言った。「兄弟たち。あなたがたに、この人たちのために何か奨励のことばがあれば、お話しください。」

13:16 そこでパウロが立ち上がり、手振りして静かにさせてから言った。「イスラエル人の皆さん、ならびに神を恐れる方々、聞いてください。」

13:17 この民イスラエルの神は、私たちの父祖たちを選び、民がエジプトの地に滞在していた間にこれを強大にし、御腕を高く上げて、彼らをその地から導き出してくださいました。

13:18 そして約四十年の間、荒野で彼らを耐え忍ばれ、

13:19 カナンの地で七つの異邦の民を滅ぼした後、その地を彼らに相続財産として与えられました。

13:20 約四百五十年の間のことでした。その後、預言者サムエルの時まで、神はさばきつかさたちを与えられました。

13:21 それから彼らが王を求めたので、神は彼らにベニヤミン族の人、キシユの子サウルを四十年間与えられました。

13:22 そしてサウルを退けた後、神は彼らのために王としてダビデを立て、彼について証

しして言われました。『わたしは、エッサイの子ダビデを見出した。彼はわたしの心になかった者で、わたしが望むことをすべて成し遂げる。』

13:23 神は約束にしたがって、このダビデの子孫から、イスラエルに救い主イエスを送ってくださいました。

13:24 この方が来られる前に、ヨハネがイスラエルのすべての民に、悔い改めのバプテスマをあらかじめ宣べ伝えました。

13:25 ヨハネは、その生涯を終えようとしたとき、こう言いました。『あなたがたは、私をだれだかと思っているのですか。私はその方ではありません。見なさい。その方は私の後から来られます。私には、その方の足の履き物のひもを解く値打ちもありません。』

13:26 アブラハムの子孫である兄弟たち、ならびに、あなたがたのうちの神を恐れる方々。この救いのことばは、私たちに送られたのです。

13:27 エルサレムに住む人々とその指導者たちは、このイエスを認めず、また安息日ごとに読まれる預言者たちのことばを理解せず、イエスを罪に定めて、預言を成就させました。

13:28 そして、死に値する罪が何も見出せなかったのに、イエスを殺すことをピラトに求めたのです。

13:29 こうして、彼らはイエスについて書かれていることをすべて成し終えた後、イエスを木から降ろして、墓に納めました。

13:30 しかし、神はイエスを死者の中からよみがえらせました。

13:31 イエスは、ご自分と一緒にガリラヤか

らエルサレムに上った人たちに、何日にもわたって現れました。その人たちが今、この民に対してイエスの証人となっています。

アンテオケはエルサレムから北へ500キロほど（愛知県から福島県くらい）、キプロス島はアンテオケから概ね西に200キロほど海を渡ります（愛知県から神奈川県まで船で行くような距離）。そしてそのキプロス島のパポスからペルガ（今のトルコにある）までは、海を300キロほど北に行きます。さらにピシディアのアンテオケは北に100キロです。一行ははるか遠くに来たと感じたことでしょう。

このアンテオケにもユダヤ人たちは生活しており、会堂を建てて旧約聖書に従い、ユダヤ教徒として生きていました。パウロは旧約聖書の朗読の後に、その聖書に基づいて福音を語ったのです。

福音を伝えるときには、相手を罪人として否定してから語るのではなく、このように共通の理解から始めることも必要です。ここで共通理解は「神の歴史と救い主の約束」ということです。そしてその理解があればこそ、救い主としておいでになったイエス様を殺したというユダヤ人の罪が明確になるのです。

伝道の限界を自分で決めてしまうことなく、神の聖霊に従って進みましょう。そこには宣教の足がかり（パウロにとってのユダヤ教のように）となるものが備えられており、チャンスに満ちていることでしょう。

- ①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）
- ②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）
- ③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）
- ④この世にあって何を実践しますか？

13:32 私たちもあなたがたに、神が父祖たちに約束された福音を宣べ伝えています。

13:33 神はイエスをよみがえらせ、彼らの子孫である私たちにその約束を成就してくださいました。詩篇の第二篇に、『あなたはわたしの子。わたしが今日、あなたを生んだ』と書かれているとおりです。

13:34 そして、神がイエスを死者の中からよみがえらせて、もはや朽ちて滅びることがない方とされたことについては、こう言っておられました。『わたしはダビデへの確かで真実な約束を、あなたがたに与える。』

13:35 ですから、ほかの箇所でもこう言っておられます。『あなたは、あなたにある敬虔な者に滅びをお見せになりません。』

13:36 ダビデは、彼の生きた時代に神のみこころに仕えた後、死んで先祖たちの仲間に加えられ、朽ちて滅びることになりました。

13:37 しかし、神がよみがえらせた方は、朽ちて滅びることがありませんでした。

13:38 ですから、兄弟たち、あなたがたに知っていただきたい。このイエスを通して罪の赦しが宣べ伝えられているのです。また、モーセの律法を通しては義と認められることができなかったすべてのことについて、

13:39 この方によって、信じる者はみな義と認められるのです。

13:40 ですから、預言者たちの書に言われているようなことが起こらないように、気をつけなさい。

13:41 『見よ、嘲る者たち。驚け。そして消え去れ。わたしが一つの事をあなたがたの時代に行うからだ。それは、だれかが告げても、あなたがたには信じがたいことである。』』

「アブラハムの子孫」とは民族的ユダヤ人であり当然ユダヤ教徒で、「神を恐れかしこむ方々」とは異邦人（民族的にはユダヤ人ではない）であってユダヤ教を信じる人々のことです。パウロはユダヤ教の中にいる人々とも共通するところは、その聖書理解に立ち、しかしその間違いに関してにははっきりと述べています。つまりユダヤ人たちが約束の救い主であるイエスを殺したということです。

また神の約束と、死に打ち勝った勝利とを明確に述べています。そして「信じる者はこの方によって開放される」という明確な救いの良き知らせを告げています。これが伝道のことばです。私たちはそのことばが伝わるように、生き、愛し、交わっているのです。

そして最後にパウロは聞いた人々の決断を促します。「滅び」ということばを使っていますが、救いが永遠の滅びからの救いである以上避けられないことばでもあります。これらのことを、愛と聖霊によって語る必要があるのです。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？





13:42 二人が会堂を出るとき、人々は、次の安息日にも同じことについて話してくれるように頼んだ。

13:43 会堂の集会が終わってからも、多くのユダヤ人と神を敬う改宗者たちがパウロとバルナバについて来たので、二人は彼らと語り合い、神の恵みにとどまるように説得した。

13:44 次の安息日には、ほぼ町中の人々が、主のことばを聞くために集まって来た。

13:45 しかし、この群衆を見たユダヤ人たちはねたみに燃え、パウロが語ることに反対し、口汚くののした。

13:46 そこで、パウロとバルナバは大胆に語った。「神のことばは、まずあなたがたに語られなければなりません。しかし、あなたがたはそれを拒んで、自分自身を永遠のいのちにふさわしくない者にしています。ですから、見なさい、私たちはこれから異邦人たちの方に向かいます。

13:47 主が私たちに、こう命じておられるからです。『わたしはあなたを異邦人の光とし、地の果てにまで救いをもたらす者とする。』」

13:48 異邦人たちはこれを聞いて喜び、主のことばを賛美した。そして、永遠のいのちにあずかるように定められていた人たちはみな、信仰に入った。

13:49 こうして主のことばは、この地方全体に広まった。

13:50 ところが、ユダヤ人たちは、神を敬う貴婦人たちや町のおもだった人たちを扇動して、パウロとバルナバを迫害させ、二人をその地方から追い出した。

13:51 二人は彼らに対して足のちりを払い落として、イコニオンに行った。

13:52 弟子たちは喜びと聖霊に満たされていた。

福音が人々を変えてゆく様子を見ながら、パウロとバルナバは「神の恵みにとどまっているように」と勧めました。この後は自分たちが先に進んで行くので、アンテオケにはいわゆる「無牧の教会」が残されるわけですが、その教会にとって何よりも必要なのが「神の恵み」を忘れないこと。その「恵み」によって生きること、また「恵み」に感謝して、「恵み」に依って行くということと考えたのでしょう。

今日の教会には、与えられた「恵み」に感謝して「とどまって」生きるというよりも、「もっと恵みが欲しい」と求める人の方が多いかもしれません。自分自身を省みる必要があります。

町中の人々が集まって来たとありますから、ほとんどはユダヤ人ではない異邦人です。ユダヤ人たちは信じた者もいましたが迫害する者も多く、パウロの宣教はユダヤ人優先から異邦人世界へと、大きく展開しました。それは聖書の全体的な理解と現実に関く神のみわざによるものです。人生には新しい展開が必ず必要です。神の聖書とみわざに目を留めましょう。

パウロはが引用した聖書には、「預言者に言われているような事が、あなたがたの上に起こらないように気をつけなさい。」とあり、本人の決断が救いと滅びを分けるということが分かります。一方、48節には「永遠のいのちに定められていた人たち」とあり、本人の決断とは関係なく救いか滅びかが決まっているような印象を受けます。

もしも救いというものすでに決まっていて、本人の信仰の決断とは関係ないものなら、宣教の意味がなくなります。また神はある人々を地獄に追いやるために創造されたことになり、神の愛の御性質そのものが崩壊してしまいます。

どこに問題があるのでしょうか。問題は、人間の表現で聖書とは別に法則を作り出して、その法則

にみことばを当てはめようとするところにあります。そこから果てしのない神学論争が生まれるのです。

聖書の理解の違いによって各自がに自論を持つことは避けられませんが、それに固執するのはやめましょう。むしろ弟子たちのように「喜びと聖霊に満たされて」前進しましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

